

子どもの宗教性および スピリチュアリティの発達をめぐって

南山大学総合政策学部 准教授
西脇 良 (にしわき りょう)

Profile — 西脇 良

1992年、カトリック司祭に叙階され、司牧・教育活動に従事。白百合女子大学にて発達心理学を学び、2003年、博士号（心理学）取得。南山大学講師を経て現職。2008年より南山大学附属小学校指導司祭を兼職。同小学校では「宗教」の授業や聖歌隊の指導等に関わる。専門は発達心理学、子どもの宗教性発達、子どもを取り巻く宗教的環境に関する研究。著書は『日本人の宗教的自然観』（単著、ミネルヴァ書房）、『宗教心理学概論』（共編著、ナカニシヤ出版）など。



聖堂（チャペル）にて

まずは、勤務先のミッション系小学校での微笑ましいエピソードをひとつ。職員室で仕事をしていると、同僚のシスターがやって来て、小さな紙片を見せてくれた。校内の聖堂で祭壇の準備をしていたところ、祭壇を覆う白布の下にこの紙がはさまっていた、という。縦2.5cm × 横4.5cmの小さな紙片の表には、鉛筆で次のように書かれていた。

今日ピアノでおこられないようにしてください。おねがいします。おねがいします。

裏をみると、そこにも、「おねがいしますおねがいします」と、呪文の如く文字がびっしりと書き込んである。書かれた文字から、この「神さまへの願掛け札」の主は低学年の子どもと推察された。書いた子は、その日学校が終わるとピアノのおけいこが待っているのだろう。いつの時代もピアノは叱られてやるもののような。ピアノの先生からか、はたまたお母さんからか、とにかく「おこられないように」との願いを小さな紙に託し、休み時間にこっそり聖堂に行き、祭壇まで歩み、見つからないようにと白布の下にそっと差し入れ、その小さな両手を合わせて、十字架の前で祈りを捧げたのであろう……。

詩人・谷川俊太郎の訳で話題になった『かみさまへののがみ』シリーズ（Marshall & Hample,

1967／谷川訳, 1977）を彷彿とさせる、大人からみれば「微笑ましい」このエピソードも、大人にとっては必死なのだ。誰にも話せず、悩み、自問自答した結果の行動であっただろう。大正から昭和初期にかけて子どもの宗教性の問題に取り組んだ児童心理学者・關寛之は、こうした子どもの真剣さを指して「必至痛切な生命の要求」と表現している（關, 1944）。關は、子どもの宗教性をめぐる基本概念として「生命の宗教活動を生起し可能にする生命自身の具有する傾向」である「宗教傾性」を仮定し、宗教傾性の本質を「生命拡充傾性」にみる。生命拡充傾性とは、「宗教的存在を生産し又は発見し、それと結合し、それから限らない福祉を享けて、生命自身を拡充してゆく傾性」（關, 1944, p.108）のことである。事例として挙げた祈願行動に即していえば、子どもは、ピアノで叱られるという、生活上の困難な問題に直面し、これを乗り越えようとの「必至痛切な生命の要求」から、大人から学んだ方法を、場合によっては改変しながら用いて、問題解決としての「福祉」を得ようとする。戦前、児童心理学者によって説明された子どもの宗教祈願行動は、遙かなる時を越え、2008年に開校したばかりの、或るミッションスクールの聖堂において反復されたのであった。

スピリチュアリティ、信仰、宗教的情操

上の祈願行動のみならず、超自然的な領域を

めぐる子どもの心理および行動に対する心理学的研究は、一般には「宗教心理学」として認知され、「心理学」誕生の当初から研究が継続されてきた。他方、近年「宗教」の語に並置されて、あるいは単独で、「スピリチュアリティ」を冠した研究書が次々と公刊されている。先駆的にインパクトを与えたのは、コールズ (Coles, 1990) の *The spiritual life of children* (邦題『子どもの神秘生活』) であっただろう。8～12歳を最多年齢層とする約500名の子どもへの30年余に及ぶインタビュー調査をまとめた書である。研究当初は子どもの「宗教生活」に限定し、無神論の親をもつ子どもや自ら無宗教を表明する子どもを対象から外すほどであったという。しかしその後、「信仰によってではないが、日常の生活に意味を見出し、この世界に積極的にかかわる姿勢」(Coles, 1990 / 桜内訳, 1997, p.333) をみせる子どもの存在に気づき、子どもの「宗教生活」から「霊的生活」へと視点を拡張させていった。第12章の章題“Secular Soul-Searching” (邦訳「宗教にとられない自己探求」) に端的にみられるように、コールズにおいて「霊的生活」とは、既成宗教に依拠するとしなないとにかかわらず、超自然的な領域と自己との関係を模索する子どもの心のはたらきのことであったと考えられる。

いずれにせよ、1990年代以降の子どもの宗教性発達研究をみると、スピリチュアリティの問題を避けて通ることはできない。しかし、両者の関係は微妙である。スピリチュアリティの一部として宗教性が包含されるのか(またその逆か)、あるいは、宗教性からスピリチュアリティが分離独立したのか。定義の問題それ自体で一つの研究プロジェクトが立ち上がるほどであるが、たとえばベンソン (Benson, 2005) や、オーサーら (Oser et al., 2006) は、宗教性とスピリチュアリティとの間に相違点も共通点もあるとして、両者をつなげて考える立場をとる。とくにオーサーらは、両者にまたがる概念として宗教学者・スミスの提唱する“faith”(人生に究極的な意味を与えていく活動として動的に捉えられた信仰) に注目し、宗教性もスピリ

チュアリティも共に“faith”に基づく、とする。筆者の見方もこれに近い。

なおこの種の議論は、既成宗教とそうでないものとの区別をめぐって行われる側面があり、その限りにおいて、特定の宗教に偏らない宗教的情操教育を道徳教育に導入している日本の公教育のあり方をめぐる議論とも、似た面をもつといえるだろう。すなわち、小・中学校の学習指導要領においては、1958年の改訂以降、自然や生命とのふれ合いを通して、超自然的価値である「崇高なもの」「人間の力を超えたもの」に対する「畏敬の念」を培うこと(宗教的情操)が、道徳教育の柱の一つとなっている。これはつまり、公立の小・中学校において既成宗教から区別されたスピリチュアリティを涵養する、ということなのだろうか。宗教的情操教育はスピリチュアリティ教育なのか、そうではないのか。子どもの宗教性発達を考えると、子どもの育ちの場である学校教育の側面を看過できないであろう。

認知発達論から発達システム論へ

子どもの宗教性発達を扱った研究では、神観念の発達をテーマとしたものが多い。研究例ではないが、事例を紹介しよう。図1(女児)と図2(男児)は、小学校の宗教行事で1年生に「かみさまへのてがみ」として描いてもらった絵から選んだものである。神と周囲の人々への感謝をつづる作文も課せられている。図1の作文はこうである。「かみさまへ/かみさまころをおあたえくださってありがとうございます。わたしたちが、いきることはころがあるからです。ころのいろは、どんないろでしょう。きっときれいで、いろんないろでしょう。それはしあわせを、おくってくれるでしょう。せかいじゅうがしあわせでつつまれるでしょう。かみさますてきなぶれぜんとをありがとうございます。」翼をつけた笑顔の「かみさま」と、その「かみさま」が一人ひとりに与えた「ころ」が描かれている。「ころ」から幸せが生まれ、幸せは鳥によって世界中に運ばれてゆく。絵の中の神は笑顔の女児であるが、子ど

子どもの宗教性およびスピリチュアリティの発達をめぐって

もの描く神がその子自身（同性）となるケースは珍しくない（Landy, 2001）。

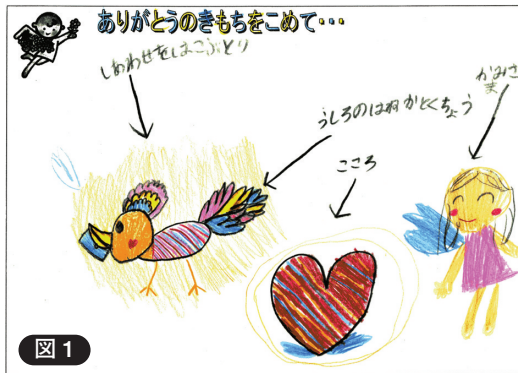


図 1

図2の「かみさま」は、この男児の頭の中にあるようである。翼をつけた「てんし」が武器を手にしている。「てんし」の下は「イエスさま」だ。こちらも大きな剣を携えて強そうである。詩人・金子みすゞ風に表現すれば、「ほくとかみさまとてんしとイエスさまとじゅうじかとともだちと」というタイトルになるだろうか。これならどんな敵が来てもへっちゃらだ。



図 2

こうした、描画や作文、あるいは面接を用いつつ、認知発達の観点から子どもの宗教性を捉える研究がこの分野での主流だったといえる。そこで見逃されがちなのは、子どもの生活と社会-文化的な文脈である。ただ、この点はよく認識されていて、段階構造論の影響下、認知発達に焦点づけられた研究から、個人と個人を取り巻く重層的な文脈との間に起こる相互作用に注目する発達システム論を前提とした研究へと、徐々に移行しつつある。たとえばベンソン

(Benson, 2006) は、スピリチュアリティ発達を支える要素として、「(個人と環境との) 相互作用」「文化（言語、慣習、規範、シンボル）」「発達のコンテキスト（家族、学校、同級生、メディア、宗教共同体など）」を挙げる。

ファウラーの信仰発達理論

さいごに、段階構造論の影響を受けつつ、しかも現在でも追究の意義ありと思われるアプローチの一つ、紹介しておきたい。宗教心理学の教科書でも紹介されることの多い、ファウラー（Fowler, 1981）の「信仰発達理論」である。ファウラーも前述のスミスと同様、人間のダイナミックな“faith”（信仰）活動を基礎概念に据える。彼によれば信仰とは、人生において意味や価値を探究する活動であり、既成宗教における宗教的信仰からは区別され、しかも人間に普遍的である。信仰は、人間の究極的な状況（苦難や死など）においてその真価を発揮する。「信仰とは……自己と他者と世界を経験する仕方であり、人間存在の究極的状况を決定づける存在と価値と力のもとで、それぞれの人生の目的と意味を形成する仕方、である」（Fowler, 1981, pp.92-93）。ファウラーは意味形成活動である信仰を、ある究極的な状態に向かって発達していくもの、と考えた。その発達変化の姿を段階構造論の立場から記述しようとしたのが、信仰の発達段階である。

発達段階は、第0段階から第6段階まで想定される（0段階から6段階までそれぞれ、「原初的信仰」「直感的-投影的信仰」「神話的-逐語的信仰」「合成的-慣例的信仰」「個別的-内省的信仰」「結合的信仰」「全人類信仰」）。各段階における信仰の形式面をみるために、7観点（A～G）が用意されている。このうち、幼児期・児童期に相当する段階とされる第1段階から第3段階までの発達段階の構造を表に示す。

第1段階は3～7歳児にみとめられ、養育者から受けるさまざまな「価値と力の中心」メッセージを心像化によって吸収する段階とされる。第2段階は学童期以降にみとめられ、より

表 ファウラーの信仰発達段階例

発達段階 発達の側面	第1段階 直感的—投影的信仰	第2段階 神話的—逐語的信仰	第3段階 合成的—慣例的信仰
A 論理の形式 (Piaget)	前操作	具体的操作	初期の形式的操作
B 他者の視点取得 (Selman)	共感の萌芽 (自己中心的)	単一の視点を取得	相互的な視点を取得
C 道徳判断の形式 (Kohlberg)	罰と報酬	道具主義的な快楽主義 (互惠の公平性)	個人間の期待と同調
D 社会的意識の境界	家族, 一次的な他者	「私たちに似た人々」 (民族, 社会層, 宗教)	個人的関係のあるさまざまな集団
E 権威の所在	愛着—依存関係 / 権威の大きさ, 強度, 視覚的	権威役割の所有者 / 個人的関係による増長	個人的に価値のある集団の同意 / 信念—価値的伝統の代表者
F 世界を統一する形式	エピソード的	叙述—ドラマ的	象徴を媒介とし, 包括的に捉えた暗黙のシステム
G 象徴機能	魔術的—神秘的	一元的, 逐語的	多元的象徴 / 象徴自体が力を喚起

幼児期および児童期に相当する, 第1段階から第3段階までを掲載した。(西脇, 1998より一部改変)

一貫性をもった世界観を帰属する集団からのメッセージに即して形成する段階である。第3段階は青年期以降にみとめられ, 複数の集団へのかかわりに対応して, それぞれの集団における「価値と力の中心」を身につけ順応していく段階とされる。実際の研究では半構造化面接法が用いられ, 実施およびコーディングのためのマニュアルは現在までに4版を数える。「人生の振り返り」「関係性」「現在の価値やコミットメント」「宗教」に分類された合計25の設問が回答者に尋ねられる。全体で2~3時間を要するため, 幼児や児童用として短縮版やロールプレイを用いるヴァージョンもある。

このアプローチは, 人生観や死生観などを問うことで宗教性およびスピリチュアリティの発達を捉えようとするものである。人間の“faith”にかかわる全人格的なアプローチといえるだろう。「人格の完成」を教育の目標におく日本において, 教育の視点からも参考になるのではないだろうか。

付 記

児童画はいずれも, 南山大学附属小学校および児童の保護者の了承を得て掲載しました。

文 献

Benson, P. L. (2006) The science of child and adoles-

cent spiritual development: Definitional, theoretical, and field-building challenges. In E. C. Roehlkepartain, P. E. King, L. M. Wagener & P. L. Benson (Eds.) *The handbook of spiritual development in childhood and adolescence*. Thousand Oaks: Sage Publications. pp.484-497.

Coles, R. (1990) *The spiritual life of children*. Boston: Houghton Mifflin. [R. コールズ / 桜内篤子 (訳) (1997) 『子どもの神秘生活: 生と死, 神・宇宙をめぐる証言』 工作舎]

Fowler, J. W. (1981) *Stages of faith: the psychology of human development and the quest for meaning*. San Francisco: Harper & Row.

Landy, R. J. (2001) *How we see God and why it matters: A multicultural view through children's drawings and stories*. Springfield: Charles C Thomas Publisher.

Marshall, E. & Hample, S. (Eds.) (1967) *Children's letters to God*. London: Collins. [E. マーシャル, S. ハンプル (編) / 谷川俊太郎 (訳), 葉祥明 (絵) (1977) 『かみさまへのてがみ』 サンリオ]

西脇良 (1998) J. W. ファウラーの信仰発達理論に関する文献研究. 『カトリック教育研究』 15, 21-30.

Oser, F. K., Scarlett, G. & Bucher, A. (2006) Religious and spiritual development throughout the life span. In W. Damon & R. M. Lerner (Eds.) *Handbook of Child Psychology*, 6th ed. Hoboken: John Wiley & Sons. pp.942-998.

關寛之 (1944) 『日本児童宗教の研究』 彰考書院